

## 農林水産大臣賞

『六年間の給食の時間で学んだ事』

愛媛県今治市立朝倉小学校 六年一組 男子 渡邊 廉

小学校六年のぼくは、体も大きくなり、給食の食器や、お汁の入った食缶も友達と二人で楽々と持つことができます。一年生は食器も、食缶も全部が重たくて、何度もこぼしそうになり、上級生や、先生に、

「一回降ろして休憩しようか。」

と、教室につくまでに何度も休憩していました。一年生が初めて給食を食べる時、お手伝いで、一年生のおかずを一人で持ちました。ビックリするほど軽かったです。驚いた表情を見た先生が、

「軽いでしょ。一年生の時はこれも重たかったんよ。体が大きくなった証拠やね。六年生と一年生では、食べる量もこれだけ違うんよ。給食は、自分の体の成長が一番解る、身近なバロメーターよ。一年生のおかずの量見て。」

ぼくは、一年生の食器の中のおかずの量を見てびっくりしました。ごはんとおかず、パンの大きさも、量が少なく、小さかったです。ぼくは六年間当たり前に食べていたけれど、学年が上がるにつれて、少しずつ量が増えていること、ごはん、おかずの食缶が重たくなっている事に気づきませんでした。当たり前に過ごしていた給食の時間を考えてみました。給食はクラスみんなの協力がないと食べることができません。連携プレーが崩れると、食べる時間が遅くなります。クラスみんながお腹を空かせているのが解るので、ダラダラした行動をすると迷惑をかけてしまいます。高学年の女子は、おかずの入れ方やご飯の入れ方がきれいです。お汁の具もみんな同じ量です。低学年は、具の量やおかずもバラバラでケンカになる事が多いです。いつから上手によそう事ができるようになったのかな。不思議だけど、高学年になると計算しながら入れています。給食は、配膳の量まで自然と計算できるように成長させてくれます。六年生にもなると、好き嫌いがある事がとつてもはずかしいです。全校生徒が同じ給食を食べていて、六年生が好き嫌いをしていると、低学年も残すことが当たり前になるといけない。給食の準備から片づけまで全部が、低学年のお手本になるようにがんばりたい。最高学年になって、特に思いが強くなっていました。

給食は、地産地消を合言葉に、地元の食材をふんだんに使っています。野菜、お米、小麦が調理されるまで、同じ空気、水で育った食材を食べていると、本当に美味しい野菜、お米の味が給食を通じて、自然と解るようになりました。給食はみんなで食べるからおいしい。協力して配膳するから時間通りに食べられる。美味しい食材は農家のみなさんのおかげ。栄養士さんの栄養満点の献立。調理員さんの徹底した調理方法。給食がないと、食べる楽しさ、配膳の難しさ、どれも学ぶ事ができませんでした。体の成長、心の成長、感謝の気持ちをありがとう。大切な給食の時間。